

## 60 明治政府お雇いドイツ人医師ユリウス カール スクリバ ——外科医と学外活動の記録——

高橋日出雄<sup>1)</sup>，高橋 薫<sup>2)</sup>

<sup>1)</sup>医療法人社団成風会 高橋クリニック(足立)，<sup>2)</sup>医療法人社団成風会 タカハシクリニック(松戸)

ユリウス スクリバは日本において、明治初期、近代西洋医学の導入のもと、西洋医学の恩人といわれる内科学のドイツ人医師エルウィン ベルツとともに、東京帝国大学で外科学を教授した。大学において、スクリバの医学的な業績はその弟子といわれる大学関係の先生らによって発表され、論文や遺稿集などからその人物像が伺われる。しかし、来日する前、ドイツでの植物学の興味や外科以外の野外活動については文献上まだ充分知られていない。そこで我々はスクリバに関する文献を調査するために大学付属図書館や公立図書館を訪問し、集積した資料を渉猟し、更に関連した書籍などを読み直して検討を行った。また2018年5月、我々はドイツのDarmstadt近郊のReinheimに生まれたスクリバが故郷Darmstadt市にある州立博物館に持ち帰って寄贈書籍したと言われる日本の武具、古銭、アイヌ民族の展示品などを観察するため、現地を訪問した。スクリバに関する書籍、古書を購入して調査し、新しい知見が得られたので報告する。

スクリバはFrankfurt大学時代にL Doschとともに、ドイツ中部Hessen地方の野外植物採集に出かけ、1878年と1882年に被子植物と裸子植物を克明に観察記載した書籍を出版している。この2巻の書籍は現在古書として、ドイツの古本屋のインターネットで安価に販売しており、我々は比較的容易に手に入れることが出来た。スクリバの弟子の一人と言われて、明治23年外科入局した土肥慶蔵という医師がいる。後に土肥慶蔵遺稿集(鵜軒先生遺稿集)という本になかで、帝国大学外科医局日誌のに日常記録があり、スクリバは庭先の樹木に対して、学生や医局員に即座にCamelia Japonicaであると答えたとか、また、よく週末に野鳥Huntingに出かけた時に採集した植物など、自宅の棚に採集した植物類など沢山の乾燥した標本が保管してあったと述べている。また蝶の紋様などの説明があり、動植物に強く関心があるのが分かったとも記載されている。更にスクリバの長男であるフリッツ Fritz Scribaは日本医科大学のドイツ語教師であり、蝶など鱗翅類研究者でもあった。国際的な動物学分類学者の江崎禎三氏によると、フリッツはよく樺太に蝶採集に出かけていたようである。フリッツは幼少期、世界的に有名なドイツの昆虫学者ザイツ Albert Saitzが日本に採集に来た時、平河町のスクリバ邸に滞在していたとかで、昆虫に対する興味が強く、父親から影響を受けたと思われる。

一方、スクリバは学外医療活動にも積極的に救援を行った。1891年(明治24年5月)に滋賀県琵琶湖畔でロシアのニコライ皇太子殺傷事件が勃発した。護衛巡査が突然皇太子を切りつけたのである。世間は驚愕し、ロシアとの外交問題に発展すると慄き、その際に明治天皇の名代や慈恵会医科大学学祖の高木兼寛、日本赤十字社などが速やかに赴き、またスクリバもお見舞いに新橋から出発したと記録されている。また、1891年(明治24年10月)に愛知県美濃地方に起きた大地震(いまで言うマグニチュード8.0)があり、政府の要請で帝国大学からスクリバを長として外科医師や医局員20数名で構成された救護班が現地に赴き、救護活動を行った。一行は、1日約120名10日間、被災した人々の治療に専念した。今でいう医療ボランティアの参加である。この件に関してスクリバは、Ostasiatische Gesellschaft Tokio (OAG) ドイツ東洋文化研究会の在日ドイツ人の横浜部会で、詳細な報告の講演を行ったと記載がある。このようにスクリバは、生前、1881年(明治14年)~1905年(明治38年)まで間、大学の内外において広く活躍していた事が分かった。